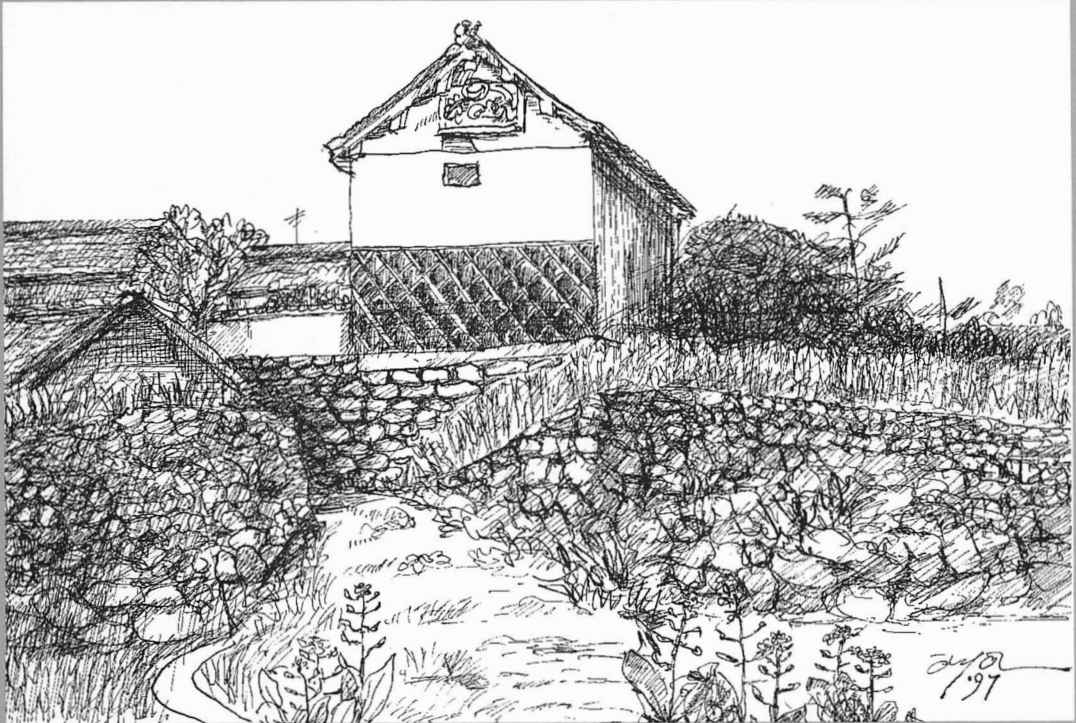


まちづくりネットワークえひめ

# 舞 とうん

VOL 51



東予市 <sup>こてえ</sup> 鍛絵のある倉

## 特 パートナースHIPのまちづくり 集

— 若者グループの活動から —

- 小さなデモクラシー運動
- まちづくりって、なーに！
- まちづくりネットワーク、いま元年！
- 河辺を知って、好いて、おもしろく
- 心の中に青い海を

アングル

笑顔のあふれるまちづくり……………(株)愛媛銀行頭取/森 信義…………… 1

特 『パートナーシップのまちづくり』 集

— 若者グループの活動から —

- 小さなデモクラシー運動……………伊予三島市/前谷 秀樹…………… 2
- まちづくりってなに?……………玉川町/青野 光尚…………… 4
- まちづくりのネットワーク、いま元年!……………川内町/近藤 照雄…………… 6
- 河辺を知って、好いて、おもしろく……………河辺村/五頭 祥介…………… 8
- 心の中に青い海を……………西海町/本多 幸雄…………… 10

論談—まちづくり—

神風が吹いた!……………熊本県小国町助学びやの里木魂館長/江藤 訓重…………… 12

キラリ光る町

今、たんぼぼが面白い  
……………北海道鶴川町むかわたんぼぼ研究所/厚海 哲子…………… 14

リレーでちょっとーク

住んでみたい村へ……………朝倉村/武田誠一郎…………… 16

出来ることからやってみよう……………小田町/樽古 政子…………… 17

研究員レポート

山口県豊北町から……………中村 博之…………… 18

福岡県吉井町から……………井上 正男…………… 20

地域を生きる

明堂八股狸によるまちおこしをめざして……………大西町/阿部 峰春…………… 22

風おこしのちかい

元気な町になーれ!……………岡崎 直司…………… 24

Information

媛のくにフラッシュ〈大西町・小松町・伊方町・愛媛県〉…………… 26

地域づくりビデオ(貸出し)のご案内

特集 “パートナーシップの

まちづくり”

今号のテーマ

若者グループの活動から

「舞たうん」四十八号から「パートナーシップのまちづくり」というメインテーマのもと特集を組んできましたが、今号は、将来を担っていくであろう若者(グループ)にスポットを当ててみたいと思います。

まちづくりもハード指向からソフト指向へと移り変わりつつありますが、これからは若い世代のもつ、豊かな個性や新しい感性、創造力等を反映していくことで、さらに「若者」と「地域」、「若者」と「行政」による連携・協調による「パートナーシップ」のまちづくりが推進されるのが肝要となってくる。

そこで、それぞれの地域で、地域に根ざした活動をしている若者の「まちづくり」に対する考え方や、意見等の中から、パートナーシップのまちづくりを探っていききたいと思います。

(編集子 稲田)

表紙の言葉

東予地区で、小さな文化遺産を見学しました鏝絵(左官職人が、漆喰で妻壁や戸袋などに飾りつける)と呼ばれるものですが、家に携わった左官業が、家内安全、厄除け、繁栄の気持ちを込めた作品のようですが、どこかほのほのとして、親しみを感じる物が多く、東予地区でも90はあると報告されています。

柳原あや子



東予市 鏝絵のある倉

# 『笑顔のあふれる まちづくり』

(株)愛媛銀行 頭取  
森 信義



人々の生活する「まちづくり」は全ての人が持っている権利であり、みんなで取り組むべき義務で

あると考えております。そういったまちづくりに対する取り組みについて、わたくしを育ててくれた川内町の話を交えて、私なりの考えを述べさせていただきます。

わたくしは、昭和四年八月に温泉郡川上村（現川内町）に生まれました。

そして、昭和二十年三月に海軍兵学校予科に進みましたが、その時に、父親の勧めもあり、川内町の山と川を一日歩いて見て回った思い出があります。

「この素晴らしい故郷を守るために自分は軍人となったのだ」「二度と故郷には帰ってこれないかもしれないが悔いはない」との気持ちを持って、一日かけゆつくりと村を歩いて回りました。

もう二度と見ることができないかもしれないという気持ちで見ると自分のふるさととは、くぬぎ林も川も木の橋も一つ一つの景色が輝きを増し、わたくしに何か語りかけ

ているかのように感じるものがありました。

そういった美しい自然の中に育ったわたくしは、いまでも幸せであったと思っております。

あれから五十六年が経過し、「川内公園」「高速道路」「テレビ中継所」と、今は多くがコンクリート施設に変わってきておりますが、祭りや諸行事にふるさとへ帰り、

みんなの笑顔に接すると、思わずほっとしてしまいます。いつになっても自分のふるさとはいいものです。

そういった気持ちで、どういう「まちづくり」に取り組むべきかをまとめてみました。

まず、「子供たち」が感動するような美しい自然をいつまでも残し、そして、「お年寄り」がゆつたりとくつろげるような空間をつくり、また、若者がお年寄りを残して都会に働きに出掛けなくてもすむような働ける職場づくりをし

ていただきたいと思っております。

最も大切なことは、「笑顔のあふれるまちづくり」に取り組むことが必要で、「いじめもない」「生活に苦しむこともない」「みんなが安心して暮らせる」「みんなの笑顔が絶えない」ふるさとづくりに取り組むことが、我々に課せられた使命だと思っております。

町や山林、田園には、そこに住む人々の心が映し出されています。わたくしもそういった「人と自然のバランスのとれたまちづくり」に少しでもお役に立ちたいと思っております。

# 特集

パートナーシップのまちづくり

—若者グループの活動から—

『小さなデモクラシー運動』

(社)伊予三島青年会議所

理事長 前谷 秀 樹



皆様、こんにちは。

平素より、我々(社)伊予三島青年  
会議所を始め、県内各地の青年会  
議所に、多くのご理解、ご協力を  
頂いております事を、心より御礼

申し上げます。

今、我々青年会議所は、大きな  
全体の流れの中で、『小さなデモ  
クラシー運動』という言葉テー  
マに、活動を始めようとしており

ます。



我々の日本は戦後、経済復興と  
いう大きな目標のもとに、世界有  
数の経済大国へと成長してしまし  
た。しかし、その裏返しとして、  
人と人が作るコミュニティや、  
パートナーシップの力が弱くなり、  
それぞれの地域の個性を埋没させ、  
精神的な部分の豊かさや人間らし  
さを失ったような気がします。  
我々は、現代社会の行き詰まりや  
閉塞感から、今改めて、其のデモ  
クラシーが、醸成されてはいな  
かったのではないかと気がつき始め  
たわけです。

『小さなデモクラシー』の『小  
さな』とは、決して、物の大小で  
はありません。一人一人が、手の  
届く足元から、身近な事を見つめ、  
考え直し、地味ではあるが、それ  
らを起点として、やがて、広い地

域へと発展して行くことが大切な  
のです。

戦後、失われた地域の個性、心  
の豊かさ、この二つを取り戻す事  
が、今後の若者に与えられた使命  
だと痛感しております。そして、  
実際、日本中で、地方分権が叫ば  
れる中、各地で様々な地域の個性  
特色を活かしたまちづくりが、若  
者の間で行われています。

我々(社)伊予三島青年会議所は、  
これまで、地元産業の紙を題材に  
したまちづくりを行ってまいりま  
した。今後、我々は、のびゆく高  
速自動車道の縦貫・横断の交差点  
として、地域から、四国全域に発  
信できるまちづくりをすべきだと  
考えております。四国四県への時  
間・距離の短縮は、多くの人々が  
訪れる以上に、逆に、若者の都会  
への流出増加の可能性も出て来ま  
す。そう言った事、全てをふまえて、  
四国四県を移動する行程の通過点  
としてのまちではなく、途中下車  
してもらえぬ「まち」、そして、  
目的があつて来てもらえぬ「まち」、  
四県にはない、新しいおもてな  
しの心を持つ様なまちづくりをお

こなっていきたいと考えております。その受け皿を、広域的な地域を対象とする為に、昨年六月、我々(社)伊予三島青年会議所と、隣の(社)川之江青年会議所は、各々の総会の席で、統合し、新しい一つの青年会議所として生まれ変わる事を決意いたしました。その決議を受け、今、両青年会議所は、統合の準備を進めながら、四国の新しい核となるまちづくりを考えて、フル回転の毎日をおくっています。四国の、ほぼ中央に位置し、四県都から高速自動車道で、一時間少々で来られる「おもてなしの心を持つ新しいまち」に、近い将来、ぜひお越しいただけるようにと、活動を続けています。

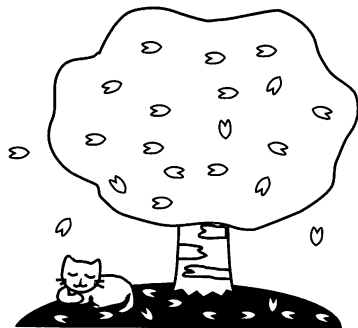
また、「たすけあいのあるまち」、「ボランティア精神の根付くまち」、「皆の事は皆でするまち」、様々な表現で、まちづくりをしています。ですが、その根本は、みな同じです。失われた心の豊かさ、自己的なの考え方、日常の生活に不自由を感じない、だから他人の事を考えない、慣れきったゆがんだ平和の中で、生きてきた若者に、助け

あい、おもいやりの気持ちを目覚めさせたのは、あまりにも非日常的な事、あの阪神淡路大震災ではなかったでしょうか。『善意』とか『ボランティア』とかそれまで一部の人達だけのもののような見方をしていた人達も、一人一人が何かできる事はないか、どうすれば助けてあげられるかと考え、行動をおこさずにはいられなかった事だったと思います。そのたすけあい、『皆の事は皆でする』気持ちを、この平和な日常の中でも、忘れない事が大切だと思うのです。先日、短い期間ではありましたが、日本海の重油災害のボランティア活動に参加してまいりました。多くの人が、油まみれになりながら、痛いような寒さの中、誰に言われたわけでもなく、黙々と作業をしている姿を見て、日本の若者もまだまだすてたものではないと感じたのは、私だけではなかったでしょう。聞けば、「自分も、同じ様な観光資源のまちに住んでいるので放っておけなかった」という人、神戸に住んでいて、「感謝の気持ちを表したかった」という

人、「船が大好きでタンカーの悪名をはらしたかった」という小学生さえいました。それぞれの人が、それぞれの思いで、一つになる・・・その素晴らしさに感動しつつ、一方では、精神的、肉体的にも相当まいっているはずの地元の人達が、笑顔でボランティアの人達と一緒に作業しているのには大変驚かされ、胸が熱くなるほどでした。先の阪神淡路大震災のように、多くの死傷者を出したわけではないが、地元住民にとっては大変な問題となっているにちがいない、なのに笑顔で作業しているのです。彼らが、あの笑顔を持ち続けている限り、日本海は、必ず元の美しい海に戻ると、その時は確信いたしました。そして、その笑顔にふれたボランティアの人達も、自分たちのまちに帰って、笑顔の絶えないふれあい、たすけあいのあるまちづくりの源となっていくことだろうと信じて疑いません。

心豊かな、たすけあいの気持ちあふれるまち、そして各地域それぞれの個性を活かしたまち・

そんなまちづくりは、今後の我々の為にも我々の子孫の為にも、必要不可欠な事だとは思いませんか、私は、そう信じ今後も皆と手を取り合って、活動を続けて行こうと思っています。



# 特集

パートナーシップのまちづくり  
—若者グループの活動から—

『まちづくりってなに？』  
玉川町生活文化若者塾「遊・湯・友」

事務局 青野 光尚



節分の日、玉川町若者塾「遊・湯・友」のメンバー三人で、こんなことを話して見ました。

(出席者)

青野 盛人

(以下「盛」)

鳥生 宏 (以下「宏」)

青野 光尚(司会)(以下「光」)

まちづくりのコンセプト

光 まちづくりって何なのかな？



長慶天皇のテレホンカード

盛 僕は若者塾に入ってから、いつもそのことを考えてきたんだけど。僕もいまだにその答えが出ていない。恐らく死ぬまでわからないと思う。今なんとなく思うことは、町の人が仲良くなることじゃないかな？

宏 うーん、それも一理ありますね。やはり「皆に喜んでもらえる」まちをつくらなければ。

光 この一年間、若者塾では色々なイベントを手がけてきたけど、二人にとって印象深かったのはどのことだった？

盛 そうだね、僕にとっては長慶天皇のテレホンカードの作成かな。みんなで考えて作った物だし、すごく好評だったからね。僕はよくやったと思うよ。

宏 歴史を掘り起こすことには賛成です。長慶天皇伝説についても、まだまだ勉強が足りない気もする

宏 凧作りも良かったですね。自分の力で遊び道具を作る。それで遊ぶって、すごく楽しいことですね。

盛 でも、あの時は参加者を集めるのが大変だった。一時はどうなるかと思った。

宏 でも、予想していたよりも多くの人が集まってくれましたからね。それに子供も大人も大満足って感じだったのでしよう。

盛 うん。結果としては大成功だったけどね。

宏 企画には自信があっても、人が集まらないと、一体何が足りないんだろうって思いますね。

光 今出たふたつのイベントは、この一年を通じて、町内に残る長慶天皇伝説をまちづくりに生かそうとしたものだった。

こうした取り組みについてはどう思う？



談話中のメンバー左から青野盛、青野光、鳥生宏

風を吹き込んだような気がするけどね。

宏 まちづくりりに生かせる素材は町内のいたる所に転がっていますね。

盛 うん。結局はそれをどのように取り上げていくかがその団体のセンスだと思ふ。

### パートナーシップについて

光 この辺りでパートナーシップについて考えてみよう。地域づくりを進めていく上で、僕たちまちづくり集団には、どのようなパートナーが必要なのだろうか？

盛 やはり、僕たちの仕掛けるイベントに集まってくれる人とのつながりは大切だよ。僕はこの頃つくづく思うけど、彼らを単なる参加者としてとらえるのではなく、一緒にまちづくりを推進してくれる同志であると考えるべきだ。彼らから様々なことを学び、こちらからも何らかの問題提起ができるようなイベントを手がけたいね。

宏 それは僕も同感ですね。盛 それから同じようにまちづくりを手がけているグループとの交

流も大事だね。三年前から北条市若者塾との交流会を行っているけど、お互いの活動のいい刺激になつていと思う。

宏 自分たちの活動のあり方を見

つめ直すいい機会にもなりますね。

盛 だからこれからも様々な団体と積極的に交流していきたいんだ。

宏 僕はそれ以外にも、やはり行政との強いつながりが必要だと思います。両者が協力しあつてこそ、より良いまちづくりができるのではないのでしょうか。

### これからの抱負

光 それでは最後に今後の抱負をどうぞ。

盛 僕は若者塾が今後どのような実績を残せるかということにはあまり興味が無い。若者塾を通じて楽しみながら自分を高めたいね。

宏 そうですね。何をやるかなんて問題じゃない。何かをやつて僕たちが楽しんで、その楽しさを町の人たちにも味わってもらおう。それが大事ですね。よく料理人の人が言うじゃないですか。『自分の作った料理でお客様に『おいしいね』

って喜んでもらった時、それが一番幸せです』って。僕たちも同じですね。町の人たちが喜んでくれる顔。それが一番嬉しいんですね。

盛 事務局はどう？

光 僕は「舞たうん」で、双海町の若松さんとスペシャル対談したい。

宏 それはちよつとずうずうしくないですか？（笑）

光 そうかな？

盛 そうだよ。



自作の凧をもって

# 特集

パートナーシップのまちづくり  
—若者グループの活動から—

『まちづくりネットワーク、いま元年』

川内町桜花塾

事務局 近藤照雄



最近ではインターネットが大ブームとなつています。ネットワークという言葉がちよくちよく目に飛び込んでくるようになったのも同じ頃でしょうか？

確かに、それまで個別に利用されてきたコンピュータが画期的な進化を遂げることとなったのがネットワークシステム、あるいはインターネットといった類になり

ます。

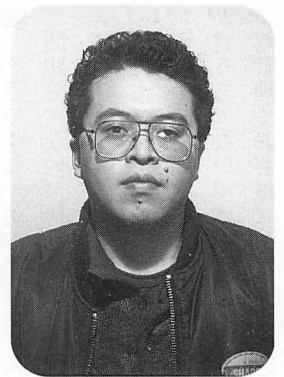
個々に運用していた情報が他の情報と結びつくとはそれは単なる個々の整数倍ではなく、その何倍もの価値を生み出すことになりました。

さて、まちづくりはどうでしょうか？

講演会だのフォーラムだのというとき、必ず一言は「ネットワーク」とか「連携・連帯」が盛り込まれているような気がします。

まちづくりやそれを主体とした塾活動にも前述のごとく、何倍もの価値を生み出すことは確かにあると思います。

しかし、コンピュータのようにケーブルや電話回線を結ぶだけで簡単につながるネットワークとは訳が違います。生身の人間同士の信頼関係に基づくネットワークは



一朝一夕で出来るものではないと思います。

かく言う私の関わっている川内町桜花塾についても、ネットワークを作り上げると言うよりもむしろその前段、準備をしているに過ぎません。

川内町桜花塾は平成元年十二月に発足し、川内町のまちおこし全般について学習活動そして実践活動を行う目的で設立されました。

当然ながらはじめは川内町について学習を行い、地域の抱える問題点などを洗い出し、どうすれば活性化を進めることが出来るのかについて意見を戦わせることが度々でした。

そんな中から生まれたのが、川内町で最も過疎化の進んでいる滑川地域を元気にするイベント「滑川ためとも祭り」でした。

渓谷沿いの美しい山村風景と、終点の滑川渓谷の美しさを一人でも多くの人に知ってもらい、イベントを通して滑川地域の方々にも元気を出して欲しいという願いから開催し、平成四年から始めて昨年で五回を数えました。



一回目は受け身であった地元の方も、そのイベント活動を通じて「まちおこし」に目覚めたか「滑川ふるさと塾」を結成し、滑川の活性化に取組み始めました。

しかし、順調なイベント開催とは裏腹に、桜花塾内部では大いなる疑問が出始めたのです。

「イベントはあくまで単なる通過点に過ぎない。我々の本当の目的は滑川地域を名実共に活性化することである」という意見があるかと思えば、「地域の課題は地域で解決するべきだ。地元にも塾が出来たのだから我々がこれ以上関与するべきではない」との意見もあり、定例会ではどっちつかずのまま時間だけが過ぎてしまいました。

塾の方向として最終的に出た結



論議を戦わせる塾のメンバーたち

論とは、「桜花塾とふるさと塾、そして行政が共に知恵を出し合って、滑川の活性化を図ろう」ということになり、平成八年度には国土庁の「地方振興アドバイザー事業」を活用し、高名なアドバイザーの方を派遣していただい

検討を進めました。

検討手法としては、川内町始まって以来の画期的手法でした。

桜花塾とふるさと塾のネットワークの醸成にも期待がありまして、行政との円滑な連携も期待できるものでした。

まだこの事業は現在進行形であり、結論づけることは早急であるうかと思いますが、あえて苦言を述べて、我々の今後の反省材料にすると共に、他の塾の方々への反面教師的な役割をしたいと思いま

す。

①やはり、行政とまちづくり団体には適当な距離「スタンス」が必要であるうかと思えます。補助金漬けもしかり、なれあいの報告書もしかり。

ネットワークとは、「べつたりくつつくことではない」と感じました。

行政とは互いに緊張関係を保ちつつ、お互いの率直な意見・提言をぶつけ合うことが肝要。

②酒の要らない「まちづくり」の会を開くことを夢としたい。お互い口をつぐんだまま形だけの意見交換では勿論つまらない。さりとて、現在の塾活動（桜花塾のことです）は酒もあって、そこに議論があるわけですが、当然ながら最後は収集がつかない、とりまともがない、結果報告の出来ない「有益な」議論となってしまうのです。

酒がさほど要らない会に成長すればきつと、もつと前進できるのですが・・・

③主体的に目的を持ってネットワークを組まなければ、価値の増加は見込めない。

つまり、一頃はやった異業種交流などはそのいい例でしょう。初めて交流した時はお互いが驚くような事ばかりで、「交流はすばらしい。ネットワークづくりが大切」と喜びますが、「何」が目的なのか、かつ、受け入れるだけでなく能動的に情報の吸収に努力しているかという点では、やや弱かったような気がします。

ふるさと塾との交流にしても、「滑川が活性化するといいですね」という、きわめて抽象的な、目的とも言えないようなテーマで議論してきたわけですから、互いに交流することの喜びも次第に失せて来々あるのです。

こんな失敗談をこの場でご披露したことは決して私たちの塾にとつて有益なことではないでしょうが、今、塾活動に行き詰まっている他の「まちづくり」有志の方々のご参考にもなればと祈りながらペンを置きたいと思えます。

きつと、桜花塾も悩み苦しみながら、地域、そして行政とのネットワークを提案し続けることでしょうか。

# 特集

パートナーシップのまちづくり  
—若者グループの活動から—

『河辺を知って、好いて、おもしろく』

K A I 援 隊

隊長 五頭祥介



平成六年十月「K A I 援隊」が  
結成された。「K A I 援隊」とは  
坂本龍馬の海援隊の海の変わりに  
「かわべ」の「K A」とアイデア・  
イメージ等のアルファベットの頭

文字「I」を併せて現在に至る。  
定員は、六名(役場職員五名、  
農協職員一名)で構成されており、  
それぞれの肩書(?)で、互いに  
協力しあって活動を行なっている。



K A I 援隊のメンバー

グループの原点を作ろうと、村長、  
助役を始め役場の各課の課長を招  
いて一、二ヶ月に一回座談会形式  
の研修会を行なっていた。その  
中から河辺村のむらづくりを思考  
し、今、自分達が何をするのか、  
どのような形で活動していくのか?  
一年間時間をかけて討論していっ  
た。そして、他の市町村が行なっ  
ていたことの真似事になるかもし

ないが、一度体験し  
てみようと思なったの  
が、さざんかの木への、  
イルミネーションの設  
置、チャリティース  
ポーツ大会の実施、村  
内の小、中学生のス  
ポーツ活動の協力を  
行なってきた。  
その中で今後の課題  
として、もともと  
プラスアルファを見つ  
けだし失敗を恐れず、  
失敗をしても、「捲土  
重来」で隊を盛り上げ  
て行きたい。  
現在、「K A I 援隊」  
のパートナーに「K A  
M E 山社中」があるが、定員は無  
限で協力していただける人は全員  
「K A M E 山社中」の一員にして  
いる。「地域」と「若者」で、河  
辺村をおもしろくしていくための  
大事なパートナーでもある。ハー  
ドからソフトへ時代の流れが変  
わっていく中、各自それぞれの目  
的意識を一つにして、議論し行動  
に移せる体制、パートナーシップ



中学生との交流

づくりを形成していきたいと思っている。

今後の展望として、今、過去を見直し、「温故知新」で何か我が隊の役立つものが見えてくるのではないかと考えている。時には歴史を振り返るのも、河辺村をおもしろくする意味でも、重要な「カギ」になるのではないかと思う。先へ進むのいいが、一息入れて過去を振り返るのも、自分たちのあらゆる

面でのパートナーと長く付き合っていくために必要なこと。

個性尊重、個孤立の時代、しかし、チームや和を大切にしていって、一人十色、自分にできることはなにか、そんな「K A I 援隊」を作り上げていくことを目標に、まだ結成して二年ではあるが、研修会等を行なって河辺村の地域づくりに役立てていきたい。

### (基本方針)

寄って選んで酔って、私達の河辺村を優しく住みよくなる。

### (活動方針)

- ・ 自己の研修に努める
- ・ アイデア、自分の意見を言う
- ・ 行動、協力する

### (事業)

- ・ 研修の開催
- ・ 村への提言
- ・ 既存イベントへの参加協力

### (やりたいこと)

- ・ ほら吹き隊長 (目標、哲学、コンセプト) ーリーダーー

### (構成)

- ・ 柿本人麿呂 短歌
- ・ 紙しばい (河辺の昔話)
- ・ 河辺をふるさとにしませんか?
- ・ わらじ製作体験学習企画
- ・ ペットボトルロケット
- ・ 戦時中の食生活体験、話、ビデオ
- ・ どんと焼 (今年二月上旬実施)
- ・ サンバ ブラジル料理
- ・ ハロウィン祭り
- ・ 地域の悪いところの写真撮影
- ・ 冷静参謀長 (理論化、組織化、経営化) ーマネージャーー
- ・ 熱血行動隊長 (営業、実践、ネットワーク) ーキャプテンー
- ・ 堅実経理事務局長 (会計、事務処理)
- ・ 国際交流部長 (国内外遊学)
- ・ 顧問弁護士 (決断・理解)
- ・ K A M E 社中 (センス・オブ・ワンダーストック、組立、反対意見等)

K A I 援隊とは、

## 坂本龍馬の海援隊

||  
K A I

K A w a b e

I d e n t i t y

本質、独自性、主体性

I d e a

アイデア

I m a g e

イメージ

I m a g i n e

想像

I m p o r t a n c e

重要

I m p r o v e m e n t

改良、改善

I n t e r e s t

関心、おもしろさ

# 特集

## パートナーシップのまちづくり

—若者グループの活動から—

### 『心の中に青い海を』

西海町若者塾

事務局 本多幸雄



### 〈塾の活動状況〉

西海町若者塾は、地域にまちづくりの風を起こす人材の育成をしようとして、町の指導で平成二年に結

成されました。塾生は現在十八名、職業は自営業から会社員、教員まで様々ですが、町職員が大半を占めています。

活動費は、一月五百円の会費と

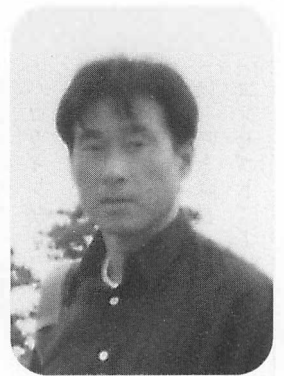
町からの助成金でまかなっています。

活動のモットーは「非まじめ」なこと。「生まじめ」ではおもしろみがないし、長続きしない。生まじめな真剣さを大切にしながらも、常識や慣習を打ち破るエネルギーやユーモアと、遊び心の中から出る発想を活動に活かしていくということです。

活動の内容を挙げると、清掃奉仕活動、西海海中公園まつりへの参加、宇和島祭り牛鬼パレードへの参加、講演会の開催など雑多ですが、中心となるのはイベントの企画と運営です。

その中でも、将来を担う子供たちを対象にした事業を紹介します。その一つが「野外映画会」の開催です。

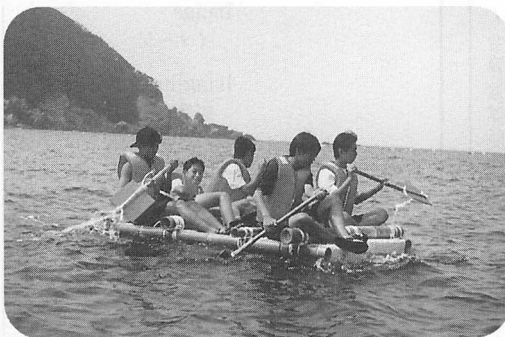
南宇和郡内には映画館がなく、



映画館のある宇和島市に行くにはバスに乗って一時間三十分ほどかかり、子供たちが自由に観に行くというわけにはいきません。

今はビデオ全盛の時代ですが、大画面の映画の迫力と感動を、星空の下で体験してもらおうという発想から企画しました。

対象が小中学生ということで、上映映画はディズニーマニアのアニメーションに決まりました。しかし、会場をどこにするかで大いに迷いました。船長の快諾を得て、役場の壁面をスクリーンに、駐車場を観客席にすることにしました。



いかだで海岸線の探検

スクリーンを張るにも苦勞しましたが、大人、子供合わせて三百人ほどが詰めかけ、一心にスクリーンを見つめる姿を見た時は、やってよかったという実感が込み上げてきました。

もう一つが、夏休みの間に行っている「九十六時間サバイバルキャンプ」です。

西海の大自然の中で三泊四日のキャンプを張り、山や海での食料調達や、いかだでの海岸線の探検を行う中で、子供の自主性を養い、西海町の自然の素晴らしさを体感してもらおうと行っているものです。

キャンプ地に水場はあるものの日陰が少なく、地面の大半を占める岩からの輻射熱で、現場は灼熱の砂漠のようになります。

子供たちにとっても、世話役の塾生にとっても非常に厳しい四日間となりますが、これ乗り越えた後の充実感が忘れ難く、毎年参加する子供たちもいます。

ここ数年、このように町の子供たちを対象にした事業を行っていますが、その理由の一つとして若



長崎県西海町の子供たちとのキャンプ交流

者の町外流出という問題がありません。西海町では、近辺に職場がないこともあり、高校を卒業した若者は、就職や進学のため松山や京阪神方面に出ていくのが普通です。現在のところ若者の流出を止める手だてはありません。そこで、たとえ町外に出たとしても、その胸の中に、澄み渡った星空や青く豊かな海など、自慢できるふるさとへの思いを残しておいて欲しいという思いがあるのです。

### 「パートナーシップについて」

私たちのパートナーと言えば、

やはり行政ということになります。

「野外映画会」の時にも触れたように、町は私たちの活動に好意的です。また、活動費の大半をまかなっているのも町からの助成金です。活動を続けるうえで「金は出すが口は出さない」という理想形に近いかも知れません。しかし反対に、町からの依頼は断れず、必殺イベント請負人となり、それが塾生の負担となっていることも事実です。町職員が塾生の大半を占めるという現状も少なからず影響していると思われまます。このあたりが問題点でしょうか。

パートナーシップといえばもう一つ、私たちが主役になり、現在長崎県の西海町(さいかいちょう)と交流を深めています。

同じ町名ということに興味を持ち、私たちが平成五年に長崎県を訪れたのが始まりで、現在ではお互いの町のイベントに参加したり、議員が訪問し合うなど、少しずつですが交流が深まりつつあります。

昨年も小学生十三人を連れて長崎県を訪問し当地の子供とキャンプ交流を行いました。



長崎県西海町での牛鬼の披露

また、秋には産業まつりに招待され、「牛鬼」を披露してきました。友だちも多くでき、酒を飲みながら話す中で、長崎県西海町も若者の流出と農業後継者不足が悩みであることがわかりました。

人口規模も産業形態も違いますが、同じ悩みを持つ町として、今後も友情を暖め、情報交換を行い、互いに切磋琢磨できるいいパートナーでありたいと思っています。

# 神風が吹いた！

熊本県小国町(財)学びやの里木魂館

館長 江 藤 訓 重



## (一) 神風が吹いた！

平成三年九月に上陸した台風19号は、まだ記憶に新しい出来事である。私の住む小国町(熊本県)でも最大瞬間風速五〇mを越える猛烈な風が吹きまくり、農作物や家屋に多くの被害をもたらした。

人々がいた。わが町のコミュニティプランチームの連中である。バブルがそのピークを迎えた平成二年『よそ様の土地に夢を描こう！』をコンセプトに、自分たちが生活する土地の利用について住民が主体となって考えようとの動きが起った。そのウラには、リゾー

ト計画やそれに伴う別荘の開発といった外的要因が大きく作用していたことは事実である。

小国町は、六つの大字から成り立つ町である。六つの村の集合体といった方がより理解できると思う。村が違えば微妙にその風土は違う。風土が違えば土地の使われ方もおのずと異なる。次代の地域リーダーを中心に土地利用計画チームと呼ばれる組織が六つ生まれ、その事前調査としての地域の点検や地域懇談が自主的に始まった。そしてそれは土地の利用を考えるには、地域の目標から、理念がまず必要であることに気づいた。その理念に沿った計画を立てる試みは、コミュニティプランと呼ばれ、土地利用計画チームもコミュニティプランチームへと変貌した。しかし、このような動きには多くの障害があったことも事実である。

小国町は九州を代表する古くからの杉の産地であり、町の経済はそれによって成り立ってきた。木

材価格が低迷する中にあっても「杉への執着」は微塵も変わらなかった。杉には土地が必要である。多くの山林を所有することがこの町でのステータスを決めた。その意味では土地本位制の最たる町のひとつであることに違いない。その町に台風19号が襲来したのである。神社の古木を始め、軒並みこの町の歴史を見つめて来た大木や将来への礎である若木までも風倒木と化したのである。

しかしながら、この事件はある

ことを住民に気づかせた。「豊かさとは？」である。杉の木が倒れることによって、日陰が太陽の恵みを受けた。例えば、洗濯物や凍結する道路などである。あるいは見えないものが見えた喜びから遠くの山波。聞こえなかったものが聞こえた喜びから川のせせらぎや鳥の声などなど。台風によって失ったものと得たもの。このことを象徴するかのように生まれた叫びが「神風が吹いた！」である。その後、陰きりという思想が生ま

れた。つまり陰をうつ杉の木を切るということである。そしてそこには広葉樹や花や実の成る木々が植え替えられた。

また、台風が与えたもうひとつの贈り物。それは小国町の住民を縛ってきた土地本位性が崩れたことである。一気に住民主体による地域づくりが、町のあちこちで実践される大きなきっかけとなった。

住民合意で下水道による社会資本の充実を実現させた地域。地域の模型を作り、そこから地域の将来像を描き、実践へと歩み始めた地域。里泊まり（地域民泊）を交流の場として考え始めた地域。地域環境についての取り組みを模索し始めた地域など。自分たちの地域は自分たちで創る！というこれらの意識の向上は、それぞれの地域に個性を生み出し、それぞれが魅力ある地域として輝き始めた。心が開き、地域が開いたのである。そして、来訪から定住という形で外から人々が移り住むようになった。

小国町の一連の地域づくりを考えると、台風19号は「神風」であつ

たに違いない。この町の産業を成してきた資源である杉が、将来の豊かさを必ずしも保証しえないと分かった時、人々は従来の価値感を変えることを余儀なくされた。そこから自主性が芽生え、足元の見つめ直しから地域の宝物探しを行った。そして人が宝物であることに気づいたのである。

**(二) 過疎が良かったと思うまい！**

さて、「神風」が吹くことよつて心が、地域が少し開いた。開放された窓から新しい風が地域に吹き込みつつある。移住者に代表される風は、またこれからの問題を地域に生み出している。

当初、行政などを窓口として、地域に移り住むケースが多かったが、最近では移住者が新しい移住者と呼び込むようになった。行政も移住者の実態をつかむことが容易で無くなりつつある。

二十一世紀は、都市住民の中で農山村に新たな価値感を持つて移住してくる人達が今より増すだろう。その意味では今の移住者たちは、西洋の植民地政策のきっかけ

を作った宣教師たちに例えられるのではないかと思う。（もちろん、純粋に布教を目的にしたのだが、結果としてそうなった）。

同じよ

うに先移住者たちは、農山村の情報を意識的ではないにしろ都市部に流していることは事実である。そのような時代の到来を予測した、農山村側の取り組みを始めるなければならない。過疎が良かったと思わない

為にも、移住者を含んだ土地利用計画を準備する時代が訪れてきているのだと思う。



木魂館で研修中の皆さん

# キラリ光るまち

# 今、たんぽぽが面白い

北海道鵡川町むかわたんぽぽ研究所

厚 海 哲 子



愛媛の皆さん、こんにちは！

私たちは、北海道鵡川町の「たんぽぽ研究員」です。今、鵡川町では地元の若者達の手によって、まちおこし活動に新たな動きが芽生えようとしています。職業や年代を越えて、町の産業や文化を語り合う場が求められているのです。

「ししゃもとたんぽぽの町」のキャッチフレーズにこだわりを持つ活動として☆ししゃもを語る会☆たんぽぽを育てる会、☆たんぽぽ研究所などがあり、その中で私たちは町のシンボル「たんぽぽ」をテーマに町を見つめ、楽しい地域活動を探っています。この思いを新聞各社、テレビ局等が報道し下さった事から北海道の地域振興補助金制度活用のご支援の声をいただきました。数種の新商品試作となりました。地域の活動に加えて、企業からの町おこしに大きな力となっているのが、たんぽぽキャラ

クターを活かした広告活動で、生コンクリート会社のサイロ一面にペイントし、夜ライトアップすることで、通行人の目を引いたり移築したケーキショップの建物全体を黄色と緑色のたんぽぽカラーで統一したり、ただでさえ、うっとうしくなる工事現場のフェンスにイメージキャラクターの「ポポちゃん」をプリントしたりと少しずつ町民の意識の中に浸透しつつあるようです。さて、なぜ鵡川がたんぽぽなのか・・・それは「一級河川鵡川」両岸の広大な河川敷地一〇ヘクタールほ

どに、春になるとセイヨウタンポポが一面に咲き誇り、黄色のジュータンを敷きつめたようになることから、昭和六十二年国土庁監修の「全国なんでも日本一」に「たんぽぽ群生日本一」として紹介され、敷地が通称「たんぽぽ公園」と呼ばれるようになり、翌年に第一回たんぽぽフェスティバルが開催されました。

たんぽぽの群生は、ひところの満開時に見られた黄色のジュータンが減少してきています。原因には、自然環境の変化や牛を放牧しなくなった為に牧草の丈が高く伸び、種子の定着率が悪くなった事、台風災害で泥水浸水に遭ったり、イベント開催で花を踏みつけてしまう状況もあり、現在はたんぽぽ保養のため花の無い七月に開催しています。

来年度、第十回目という節目にあたるフェスティバル。他の町村のイベントは地域の特産物や風景、歴史等、多様な工夫を凝らしているのに比べ、鵡川町は野に咲くたんぽぽをイメージした祭り。どこにでもあるたんぽぽ、耕作する人



にとつては邪魔なたんぼぼ。

しかし、多くの人のたんぼぼのイメージは「暖かい、力強い、夢がある」など好意的です。こうしたイメージのたんぼぼをイベントにするからには一年を通してたんぼぼへのこだわりを持つことが必要ではないかということで、「開花時期に祭りを持ってない中で、どのようにして祭りを広げ楽しんで行けるか、一過性として終えることなく通年でたんぼぼの町としてアピールしていくには・・・」を課題に話し合われる中、私たちは町内の手作りグループの協力を得ながら、研究員のアイデアを活かす方向での試作品作りを模索中です。

幸い、たんぼぼに深い関心を寄せている町外の活動実践者の協力も得ることができ、まずはたんぼぼの綿毛をそのままピン詰めにした「夢たんぼぼ」を作成。

アドバイザーの指導のもと、開花から綿毛となつて新しい命を育むまでの微妙な期間での商品作りは緊張と感動の研究活動となりました。

試作品の第二段は「たんぼぼ染め」です。染めの材料と

なるのは、咲き始めの頃の花と葉と根。分量も多量に必要で、大鍋で煮出したそれぞれに液に五種類の触媒を加え数種の布を染めるものですが、これからは、染め上がった布の生きた活用法も残された検討課題です。

さて、試作品の中では一番人気で、商品として定着しつつあるのが「たんぼぼクッキー」です。「自然食」「健康食」としてのイメージが伝えられるもので、たんぼぼの種類や葉を活用したクッキーは手作りグループに委託しての試作。イベント会場では三百袋以上が完売という好調な売れ行きでした。この人気商品を手作りグループの研究だけに止めず、プロの技術指導を受け、素朴な味の追求で、鶴川

自慢の商品開発に努力していきたいと思っています。又、今密かに広がりつつあるのが「たんぼぼワイン」作りです。ある本の切り抜きから、おもしろそうと始まった



満開のたんぼぼ公園

のですがなかなかの優れたものようです。五月に咲き始めた新鮮な花だけを摘んで作り、クリスマスに飲めるワインで、作り始めの青くさはクリスマスを迎える頃にはほのかにフルーティなアルコール香と化し、ロマンさえも感じさせてくれるのです。

研究員の遊び心から生まれた「たんぼぼうどん」もなかなかの好評を博しました。たんぼぼの花と葉を天ぷらにしてのせたうどん、

フェスティバル会場の売り物としては、うってつけの品と自負しております。

今や私たち「たんぼぼ研究員」の目は、道端に咲いたたんぼぼに釘づけ、耳はたんぼぼの四文字にピクつき、頭の中には黄色のジュータンがそよ吹く風になびいているよう。この思いが果たして町づくりにどれほど役立てられるのか、それは微々たるものかもしれませんが、でも自分の住む町鶴川を「地上二〇センチのたんぼぼ目線」で愛することのできる人達がわずかでもいる事を、そしてたかが野の花の存在でしかない「たんぼぼ」に心をくだける優しさと強さをもった町民でありたいと願っていることをこれからもアピールしていきたいと思うのです。

今年も間もなくたんぼぼの季節がやってきます。

さあ、あなたもさわやかな緑風香る公園で、たんぼぼウエディングの鐘を鳴らしてみませんか。お待ちしております。

私が住んでいる朝倉村は、愛媛県の北部、高縄半島の東部に位置しており、三方を山に囲まれ、北側は開けた平野つづきに今治市に接し、東南部は東予市に、西部は玉川町に山を隔てて接している。

また、豊かな水、美しい緑そして古い歴史と文化の里で「緑の少年団」発祥の地である。そして、朝倉村の中央を今治市、東予市、丹原町、小松町の二市二町一村を結ぶ基幹農道である広域農道（通

称、大農道）が、昭和五十八年に開通した。

この広域農道は、ただ単に農業を営んだり、農産物を輸送するための基幹的通路だけではなく、その近傍に住んでいる人たちの生活道路として、また通勤・通学道路などとして、多様な機能を有しており、地域の振興や活性化に大きな役割を果たしている。

この農道により、今治市まで車で二十五分要していたのが、十分あまりとなり、東予市へも三十分要していたのが、トンネルの開通によって十分と大幅に短縮され、生活道路や通勤道路として非常に便利になった。

また、この広域農道の利便性の向上により、沿道に次々と施設が

整備されており、村内外より多くの人たちが訪れ、あらゆる面において地域の活性化に結びついている。

一つには「緑のふるさと公園」がある。ここには、多目的広場の緑の学習棟、全国県木の森、子供広場、テニスコート、アーチェリー場などの施設があり、併せて、「ふるさと美術古墳館」や「体育館・温水プール」、そして、最近「デイスタービスセンター」や「三世代交流広場」も完成し、地域住民の憩いの場、健康づくりの場として活用されている。

また、この施設の入口には、「白坂ふるさと交流館（特産品センター）」があり、農家からの新鮮な野菜や加工品が並んでおり、村内外の人たちに利用されている。

このような村において、ベッドタウンとして、住宅団地の造成を行ない、約百区画の二つの団地はともに希望者が多く完売し、現在、新しい住宅団地を売り出している。

このような中で、団地に入られた方と接する機会があり、話し合ったところ「朝倉の人たちは、

明るく親しみやすい」とか「村」という「いなかくささ」がなく開けている」というような答えが返ってきました。私自身、生まれながら、朝倉村に住んでいて、「いなかはやじゃ」と思っていたが、このような答えが返ってきて正直言って、「朝倉に生まれてよかった」と思っている。

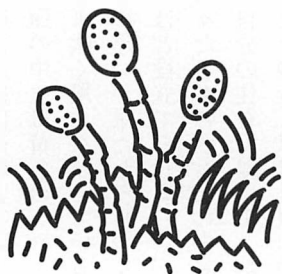
このような村ですが、一度おいでてみてはどうでしょうか。

## 「住んでみたい村へ」



朝倉村

武田誠一郎



# 「出来ることから やってみよう」

小田町

樽古 政子

子供の頃、叱られず夜出かけられる楽しみで仕方ない存在ーそれが青年団の姿でした。バンド演奏、踊りに寸劇、演劇に映画上映と名前も知らない人達の舞台を友達と見に行っていました。

青年団は社会人の集団なので、体育館や公民館で本番を迎えるのは夜七時頃で、当時は団員数も多く終了時間は十時過ぎでした。私達子供は九時が限界で、メインの演劇はほとんど見たことありませんでした。

役場職員になると同時に入団し先輩だらけで緊張していた私も、四月から五年目突入。役員になり損をした気になったり、意見が割



れて毎晩議論したり、大きな研修へ参加して友人が増えたりと、楽しいことや落ち込むことが考える間もなく交互にやってきました。喜怒哀楽を年中感じられる、忙しいけど手放せない時間です。

昔はお客さんだった舞台も今では演じる側になり、お客さんに感動してもらえぬものを創りたいと仲間と共に無い知恵を絞り合っています。

言われたら腰を上げる程度の活動から少し積極的になれたのは、様々な人達の励ましや声援があったからだと思います。青年団で行うバザーの際、「青年団のは美味しいけんな」「孫に頼まれとるんよ。」にここにこ顔で列に加わって下さいます。反対に焦り始める団員たちを理解し、笑顔で待つて下

さってるんだと思うと、その優しさに感動しました。また、演劇発表会の後日に「頑張ったなあ、次も見ろけんまた来てな」「小田にも若い力があるけん安心するわい」などと声を掛けて頂くと、準備期間の辛さなど一気に吹き飛んでしまいます。それと同時に、常に地域の人達に注目されていることにも気付きました。好き勝手に自由になれば確かに楽しいけど、時には誰かの心に残るような活動を、何より団員それぞれが、一つの行事に対して忘れられない想い出を創れるような活動を展開出来れば最高だと思います。

今小田町青年団は山場を迎えています。従来の分団制から町団統一へ生まれ変わろうとしています。町内各地へ様々な行事でお邪魔していました。そういう地域との接点も減少することになるでしょう。でも、形や回数が変わっても、私の、そして青年団の一生懸命を沢山の人に伝え続けたいと思います。

現実、青年団離れに撞かかか一方、どうすれば良いのか

と頭を抱えています。だけど、「何とかしないと・・・」と考え悩む団員がいる限り大丈夫！（と思っているのですが）

とにかく自分出来ることからやってみよう！役員会などの終わりは、いつもこの答えに辿り着くのです。



# 交流研修レポート

## 山口県豊北町から

主任研究員 中村 博之



づくり情報による  
と、キャッチフ

レーズは「ホット  
タウン・豊北・青

い空・光る海・ふ  
れあい豊かなり  
ゾートのまち」

で、ホットタウン  
とは、「活気と熱

気に満ちたまち」  
であることと、都

市では得られない  
落ち着いた雰囲気

(ほっとする雰囲気  
気)のある住みやすいまちをめざ

すことをあらわしているそうです。

この町の重点事項としては、「夕  
やけマラソン1/10 in ほうほ

く」の開催、土井ヶ浜弥生パーク  
の整備、C Iマーク作成によるイ

メージアップ対策などがあげられ  
る。また、まちづくりグループと

しては、「住みたくなるふるさと  
づくり実行委員会」があります。

このうち、土井ヶ浜弥生パークの  
整備と「住みたくなるふるさとづ

くり実行委員会」の活動を中心に、  
紹介させていただきます。

## ◎土井ヶ浜弥生パーク

土井ヶ浜弥生パークは、弥生の

里公園整備事業として、平成二年

度から平成四年度にかけ、ふるさ  
とづくり特別対策事業を利用して

整備された。土井ヶ浜遺跡は、今

から約二千年前の弥生時代の集団

埋葬遺跡として、全国的にも知ら

れ、昭和二十八年から現在までの

発掘調査の結果、約三百体にはほ

る保存状態のよい人骨が出土して

おり、この学術的にも価値の高い

遺跡を中心として、日本人のルー

ツや、弥生時代の生活風俗につい

て学習できる「弥生の里」として

土井ヶ浜弥生パークを整備し、町

の活性化を図ろうとするもので、  
平成五年五月にオープンした。

いては、町民の意見を取り入れる  
ため、町内の各種団体や学校関係  
者を中心とした委員で構成された

「土井ヶ浜弥生パーク運営協議会」  
を設置し、意見・要望等を反映さ

せているそうである。

ミュージアムの入館者数も当初

の予想年間七万人をはるかに上回

る十万人前後（初年度十三万三千  
人）と多い状況で推移している。

現在ミュージアムでは、土井

ヶ浜弥生人を含めた渡来系弥生人

のルーツを解明するため、毎年、

調査団を中国に派遣し、日中の共

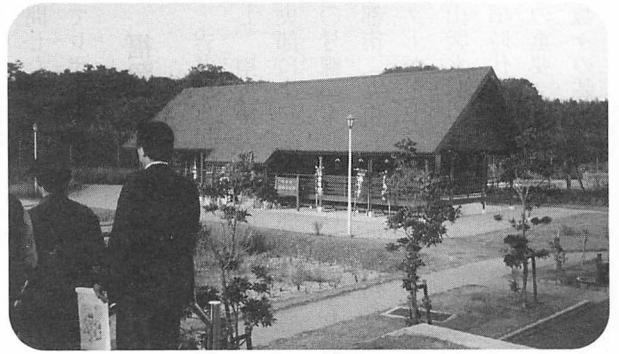
同研究事業を行っており、この共

同研究の成果を発表するイベント

として、毎年、「土井ヶ浜シンポ

ジウム」を開催している。さらに、  
町内の子どもたちを対象にして、

弥生時代や土井ヶ浜遺跡を理解し  
てもらうため、毎年「ふるさと学



ほねやすめ (特産品等販売施設)

に食べてもらっているそうである。また、ここでは、参加しながら学ぶという観点から、入館者なら自由に参加できる「土井ヶ浜弥生パーク・クイズラリー」といったゲーム感覚の企画もやっている。こういった参加して楽しみながら学ぶという企画がこれからも必要であると思う。また、「土井ヶ浜弥生まつり」が実行委員会形式で開催されており、土井ヶ浜ならではのイベントを地域の人々でつくりあげているということで、参考

になった。

### ◎住みたくなるふるさとづくり実行委員会

#### ふるさとづくり実行委員会

次に「住みたくなるふるさとづくり実行委員会」の活動等についてであるが、代表の藤岡基昭さんからグループの活動状況等について説明をいただいた。藤岡さんたちのいる上野地区は、集落の戸数二十五戸、人口八十人、高齢化率三五%で、過疎化で悩む豊北町でも指折りの過疎地域である。東京からUターンした藤岡さんが、地域のつながりが薄れていくのを何とかしようと、平成元年八月、「住みたくなるふるさとづくり実行委員会」を結成し、地域の子もたちを集めてのバーベキューパーティーを行った。そして、それをきっかけとして、地域の祭り(春夏)を復活させ、子どもたちのための「ふるさと文庫」の開設、「赤米の里」づくり等、徐々に活動の幅を広げていったそうである。

現在、会のメンバーは男性十一人、女性七人の計十八人で、月一回、定例会を開いている。

国土庁主催の脱東京体験記やひとまちも美しい「いい田舎」コンテンツ等に参加し、入選、また、情報とは情報ある報告ということ、新聞、テレビ等にも数多く登場し、情報発信を続けたり、福島県飯舘村、山形県高島町外のまちづくりグループとの交流を積極的に行っている。さらに、赤米の生産グループ「ふるさと夢企画」を誕生させ、最近では、「土井ヶ浜赤米もち」、「赤米味噌」等の開発にも取り組んでいる。

藤岡さんたちの話を聞いていると、村おこしには、やはり、藤岡さんのような地域を引っ張っていく人と、その活動を理解し、協力していくメンバーが必要であると思った。そして、そういった所では、次代を担う若者も育っていくように思えた。

「何事も始めなければ始まらない。地域の事情に応じて何か一つ着手することから始まる。あとはそれを一過性、単発的な活動に終わらせることなく、連続的な活動として少しづつ拡大していくことが大切である。あせらず、無理を

せず、楽しみながら」と言われた時の藤岡さんの生き生きとした顔が、大変印象に残った。

最後になりましたが、研修中にお世話になった関係者の皆様方に誌面を借りまして厚くお礼申し上げます。



土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

# 白壁のまち吉井

## 福島県吉井町から

研究員 井上正男

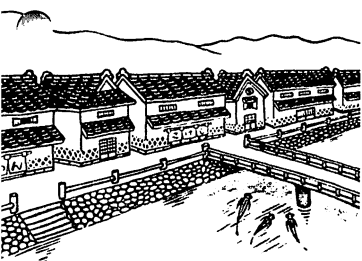


なっている。

西瀬戸まちづくり・むらおこし交流推進事業（俱事業）として訪問した福島県吉井町の概要についてレポートします。

### 福岡県吉井町の概要

吉井町は福岡県の南東部に位置し、南に雄大な筑後川が流れ、中央部にJR久大本線と、国道二一〇号線が東西に並行して走る田園都市（九州大分自動車道朝倉インターから十分）である。古来より山紫水明の地で、縄文、弥生、古墳時代から文化の開けた所で、国の重要文化財として指定を受けた数々の装飾古墳があり、出土品は、



広く考古学界に知られており、独自の白壁土蔵づくりの商家が軒を連ね、町中を流れる幾筋もの清流と溶け合って、情緒豊かな町である。当地も過疎化が進み、高齢化率は、一九・九%、人口は約一万八千人と

なっている。

### 吉井町のまちづくり活動

#### 1. 「白壁通りの由来」

当地は中世・近世において筑後の政治・生産拠点として重要な地となり、久留米（有馬藩の城下町）と日田（天領）を結ぶ豊後街道の宿場町として、また筑後川を利用

した緒物資の集散地として繁栄した。農産物に付加価値をつけた、味噌、醤油、こうじ、酒等の生産が盛んだったという時代背景があり、富が当地へ集中し、多くの豪商が誕生して、吉井銀と呼ばれた。ちなみに日田の豪商は日田金と呼ばれた。そのような中で、商品等を腐敗や火災（江戸から明治にかけて三度の火災が教訓となる）から守るため、耐火を兼ねた白壁の土塀、土蔵が建てられ、白壁通りと名付けられた。その後、幸いにも少し時代の流れに乗り遅れた事で白壁通りが今日まで現存するに至ったそうである。

#### 2. 「町づくりは

#### ひとづくりを実践」

ふるさと創生資金一億円の使用目的について、協議、検討するために性別職業、年齢層もまちまちな百名の住民が選ばれ、「百人会」という組織が設置されいろいろ論じ合っ

たが、結局結論を導き出すに至らなかった。

そこで、結論が出ないのなら、町おこしの原点にもどり、まず「人づくりからめざそう」という事になり町より一億円を助成し、合計二億円を積立ててその果実を人材育成のための費用とした。

平成三年より、毎年全国各地にあるまちづくりの優良先進地へ、一般公募で集まった住民を派遣し、先進地のコンセプト、ノウハウを肌で吸収して帰った。平成七年からは、役場職員も参加し、今日までこの人材育成事業は維持している。この派遣された人々が中心となり、いろいろなまちおこしのグループが数多く育って来た事は大きな成果であった。

例えば、「泉水をまもる会」、「花の里」、「人力車を走らせる会」等のいろいろな民間のまちづくりアイデアグループが生まれ、それがふるさと創生事業として今日まで引き継がれている。これら「まちおこしグループ」の活動の大きな特徴は、あくまでも民間（住民）の活力が主体の民間主導型で行い、

行政は最初の一回切りの助成を行うが、二回目以降は、助成もなく、当然自分達だけで引き続き活動を行っている。行政は金も口も出さないのだ。

ちなみにこれらのグループのメンバーは先程のまちなみ、生涯学習、まちづくり先進地視察に派遣された人達である。

### 3. 「町並みを生かした

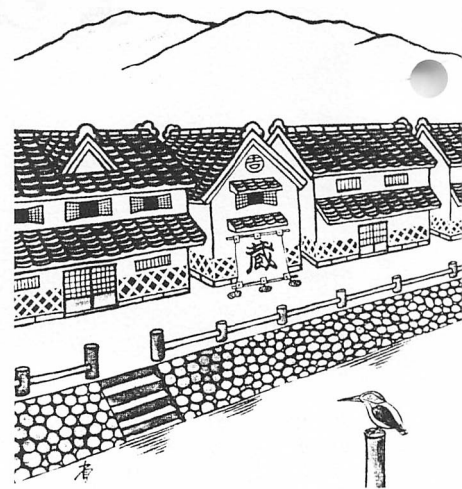
#### まちづくり」

白壁土蔵造りの町並みはひっそりと静まり返り、国道二一〇号線で車が止まるのは赤信号のときばかりである。吉井町おこし課山崎昇三係長は、博多どんたく、有田の陶器市への観光客の流れを吉井の信号を通過するだけでなく、なんとか吉井へ止める方法はないものかと毎日考えていたそうである。そんな中、ふと白壁土蔵造りの町並みを生かしたまちづくりができないものかと思いついた。

### 4. 主な活動事例

#### ① 「小さな美術館めぐり」

地元には美術館がないので、有志



で一人一万円を出し合い実行委員会を組織し、町並みを活用した美術館めぐりを企画した。喫茶店、骨董店、菓子店、窯元、三十余ヶ所を展示会場として地元のコレクション、展示館主が、作品の説明、案内役を勤め、何を飾るか展示等に関する交渉事も全て展示館主が行っている。そうする事で地元の宝探し(吉井に何かがあるかを知る)ができ、新しい文化を取り混ぜ活かす事ができるのである。又見学者と作家(展示場へ常駐の作家もいる)や地元の人との言葉のキャッチボールによる心のふれあいによる交流を大切にしている。このようなまちづくり活動は、商

会を組織し、町並みを活用した美術館めぐりを企画した。喫茶店、骨董店、菓子店、窯元、三十余ヶ所を展示会場として地元のコレクション、展示館主が、作品の説明、案内役を勤め、何を飾るか展示等に関する交渉事も全て展示館主が行っている。そうする事で地元の宝探し(吉井に何かがあるかを知る)ができ、新しい文化を取り混ぜ活かす事ができるのである。又見学者と作家(展示場へ常駐の作家もいる)や地元の人との言葉のキャッチボールによる心のふれあいによる交流を大切にしている。このようなまちづくり活動は、商

ので一石二鳥であることも成功した原因である。このようなアイデアがなければ古い町並みがあるところも多いので、モノマネでは勝負にはならないと思われた。

#### ② 「おひなさまめぐり」

お年寄りの「最近は何もできず、おひなさまを飾らなくなった。」という言葉がヒントになり、この企画が生まれた。

それなら、自分達でおひなさまを飾り楽しんだらどうだろうかという事で民芸品店、古美術店、お菓子屋、旧家等二十カ所の会場にひな飾りを展示した。期間中十五万人もの人が訪れ人々の目を楽しませる大イベントとなった。おひなさまめぐりのマップ、パンフレット等の費用は、展示場、お食事処との会費でまかなわれている。街道塾の事務局長いわく自分達で楽しまなければ、まちづくり活動は長続きしない」と言われた事が大変印象的であった。

③ 「しらかべ楽市・楽座」  
白壁通りの町並みの二百メートルの道を当日は歩行者天国にして、軒先市と称して家の軒下でフリーマーケット、ノミの市、土蔵コンサート等が開かれ、子供達も参加できるイベント広場も用意される。自主申告制で売上げの5%が運営費として使用される。まさしく典型的な住民参加型のまちづくりである。

#### 終わりに

山崎さんより、丁重なる年賀状をいただき、その中で本年度の催し物のご案内を見ていて、「何事もアイデア、やる気が必要だ」と言われた事を思い出し、まちセイン業務にもこのモットーを生かさなくてはと、気持ちを新たにしました。最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず、ご親切にご対応いただきました関係者の方々に誌面を借りましてお礼申し上げます。

# 地域を生きる

## 「明堂八股狸による まちおこしをめざして」

大西町 夢遊21塾長

阿部 峰 春



いま、全国の各地方からいろいろな地域づくりの楽しい話題が伝わって来ます。

大西町からも明るく素敵な情報発信ができればと、平成二年十月若者塾「夢遊21」が誕生しました。

しかし、当初メンバーはまちづくりへの夢も考え方もまちまちで、話し合いはこれからの塾の在り方に終始し、その結果、回を重ねるたびに右へ左へ、前進したと思えば後戻りしたりと激しく揺れ動いたのです。けれど、この試行錯誤こそまちづくりに取り組もうとする「夢遊21」の産みの苦しみと信じ、その中から塾の活動目標を「大西イメージアップ作戦」と定め、これまでその成功突っ走ってきた六年間でした。そして、常にその根底には自由気ままに夢見て遊ぶという基本スタンスをもち続けて

来たところでは。

あいかわらず「夢遊21」ってなんなの？なにしてるの？」と塾への評価はまだまだですが、とりあえずは急がずあわてず、今までどおりマイペースの歩みを続けたいと思います。

大西町には地域づくり活動にたずさわるたくさんの方々の先輩、良き理解者がいらつしやいます。私達も塾としていくつかの問題を抱えながらも、新しいメンバーを迎え強力なエネルギーを注入することで再生をはかり、地域づくりの輪を大きく広げていきたい考えです。その意味で、真剣に、そしてちょっと遊び心を取り入れた我々の活動は、いままさに始まったばかりなのです。

大西町のイメージ転換の必要性については、以前より町の大きな課題として町当局の策定した「おおにしふるさとづくり計画書」にも位置づけられています。

「夢遊21」でも、開塾当初にて「大西ふるさと情報マップ」を作成し地域情報を収集するなかで、改めてイメージ転換の必要性を再認識



し町の施策とも合致したところ  
す。塾を始動するにあたり、活動  
の基本目標として「大西町イメー  
ジアップ作戦」を掲げたのもそう  
した理由がありました。

ところが、具体的に活動する段  
になって行き詰まってしま  
い、ならば原点に立ち返れ  
とばかり「大西ふるさと情  
報マップ」の見直しを行っ  
たのでした。そしてその作  
業のなかで、驚くべきはこ  
の小さな町にタヌキにまつ  
わる伝説が数多く残され、  
なかでも『明堂八股狸』は、  
その昔広く西日本一円に知  
られた「狸の大親分」だっ  
たというのです。こんなに  
インパクトのある面白い素  
材を見逃ごす手はありません  
。我々はどことんこの『明  
堂八股狸』にこだわってみ  
たいと考えました。

『明堂八股狸』については、  
大西中学校編集発行の「大  
西の伝説」のなかに詳しく  
紹介されていますのでこれ  
を引用します。



昭和初期の明堂さん

**注** 「明堂八股狸」は昭和の初期  
万病治癒の八股大明神（お狸さ  
ん・明堂さん）として多くの人々  
の信仰を集めた。

お狸さん信仰の起こりは、山之  
内明堂の地の山桃の木に八股狸が

住むと云われ、この狸を地元の人  
達が信仰するようになったことに  
由来する。昭和九年から十年頃  
にはピークを迎え、関西、四国、九州、  
遠くは北海道から、多い日には一  
万人以上の参詣者があったと伝え  
られる。町内の海岸線には

ざらりとチャーター船が重  
なり、今治からは臨時バス  
が出、大西駅には急行便が  
停車して大混雑した。また  
海岸から明堂までの三キロ  
にわたる参道には途切れる  
ことなく参詣者が続き、道  
の両側には露店が建ち並び、  
境内には賽銭とお供物の油  
揚げで溢れ、たくさんのお  
ミ山のなかからは大金がで  
てくることもあったという。  
これほどに賑ったお狸さ  
んも、あるとき美しい四人  
の女性が参詣に現れて以来  
パツパツと寂れてしまった。  
彼女たちが、『明堂八股狸』  
を連れ去ってしまったのだ  
とも伝えられている。

我々『夢遊21』はこの『明  
堂八股狸』をなんとか復活

できないものかと考えています。



# 風おこしのちかい

## 『元気なまちに

## なーれ!』

えひめ地域づくり研究会議

運営委員 岡崎 直司

保内町と八幡浜市で、私が関わっている事について述べてみたい。

宇和町に住する者が何故?であるが、保内には八年余りを住み町並みのPRを趣味とした。八幡浜市は、何を隠そう二十六回も転居を繰り返した私のルーツ生まれ在所在地なのだ。

### 《少し元気づいてきた保内町》

私はひいき筋なので、多分に肩入れもあるのだが、岡目八目的に見ている姿が見えてくる。その発震源は、実は「保内大学」とい

うものの存在だ。

エッ。保内に大学なんかあったっけ、と急に受験生たちから質問が飛びそうだが、諸君!この大層はイイ!!。何てったって入学に際して試験が無い。ただし入学資格者の条件はある。それは、保内を愛している事、又はこれから愛そうという意志のある者、コレである。

設立後、丁度一年が経過するので、足跡を振り返りつつ整理してみよう。ここに、記念すべき入学式における主催保内まちなみ倶楽部の経過説明書があるので引用し

てみる。

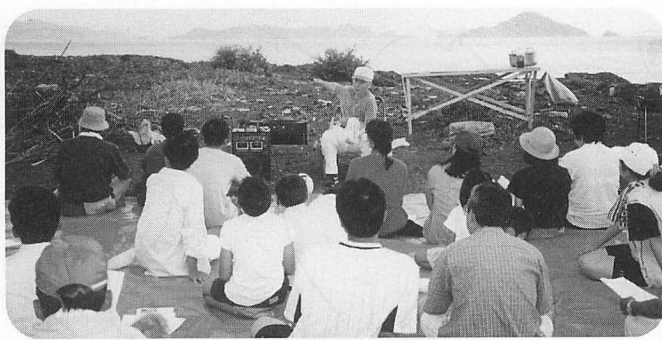
ある日、倶楽部結成後何回目かの忘年会が開かれた。その席上、地域の風景というテーマが話題に上った。風景は実際どこにでもあるものだが、その見方は千差万別人によって様々に見え方が違う。そして、差別的に受け取られると困るが、各人の教養の差でまた風景も違って見えるのではないか。

即ち、それぞれの教養を高めて行くことで、それまでと違う風景と出合え、且つ地域の将来を展望するヒントもそこから生まれて来るのではないか、そんな話だった。

丁度、身体を程よく巡ってきたアルコールの力も手伝って、「そんならいつその事我々で大学でも作って勉強せないけんネや。」結局この一言がその後の展開となるのだから瓢箪から駒とはオソロシ。

後日、何度か話し合いが持たれた。「名前は何にしよ。」「昔の川之石小の前身やった名前もろうて港南大学いのはどや。」「町花の水仙をとって水仙大学は?」「そら大

レメ大学、からみ大学、保内義塾、etc。そして我々が選んだのは、奇をてらわずにオーソドックスな「保内大学」でした。

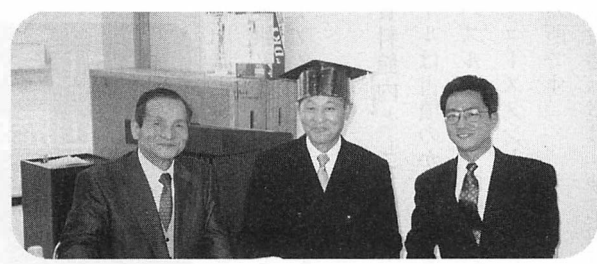


佐島のキャンプの様子

結局、年四回の講座開設を骨子として、町内から五十名の受講生を会費制で募り運営した一年は次のようなものだった。

ご覧の如く実に盛り沢山。これだけ消化する為には、多くの人が支え関わっているという事実があ

る。都会から父祖の地へUターン定住され、学長になって頂いている笑顔の輝く白石久晴氏、まちなみ倶楽部設立からの当初メンバーで、票にならぬ活動に汗する兵頭考健町議、最も繁雑で地味な裏方をテキパキこなす町商工会の安藤加代子さん。その他多くの地元



保内大学開校時のスナップ  
左から二宮通明町長、白石久晴学長、私

理解、目に見えぬネットワークの力が今徐々に上向き始めている。あせらず継続発展していったらいいものと思う。二月にはNHK「花へんろ」のロケも行なわれ、町民

の方々も喜ばれた。ヒト、モノ、素材の良い所には人は注目するのだ。その地が輝けるかどうかは、その地に住む人の視点次第なのだ。

### 《八幡浜市に吹いた一陣の風》

視点の話から紹介したい話がある、八幡浜と言えば、残念ながら目下精神的活力はイマイチ。原因は市中心部の元気の無さ。北針」で活気づく真網代や公民館活動の熱心な自土地区など周辺部が

いいだけに残念だと常々思っている。メセナ八幡浜の芸術文化活動は全国的にも注目されているが、如何せん効果に長い時間を必要とする。さて、そんな町に、昨年末一陣のさわやかな風が吹き抜けた。もちおくりの会主催による「河野康弘・五十二銀行DEジャズピアノ・コンサート」がそれである。これは、空店舗となった前愛媛信用金庫八幡浜支店（大正八年建築の旧五十二銀行）を会場に行なったもので、ちょっと前のお嬢さんたち（おばさんとも言う）の会「もちおくり」とは、屋根を支える建築部材持ち送りの事で、八幡

浜の古い商家でよく見かける。市の文化センターに私の受け持つ「ふるさとウォッチング講座」という文化教室があり、皆さんはこのOBの方々だ。市内をウォッチングする過程で「我が町八幡浜もそう捨てたもんじゃないワ」とばかり、魅力アピールする一環もあって件の催しとなった。何分

を偲べる建物が一つ何とか残る事となった。女性が動くとそのパワーには脱帽である。第一理屈で動く男共のような陰が立たないし、しかもコミによる波及効果が絶大。もちおくりの会は、まちづくりを指す会でもないで、今後はどう進むか判らないが、一つの魅力的な雰囲気街に投げかけた事だけは確かである。これから見守りた

| 開催年月日        | 内容   |
|--------------|--|
| 平成8年<br>4.14 | 保内大学入学式<br>～町並のシンボル白石和太郎洋館にて～                    |
| 5.19         | 第1回講座<br>犬伏武彦氏（民家研究家）<br>演題「国際的な時代における日本の建築文化」   |
| 7.20<br>.21  | 第2回講座 佐島キャンプ<br>宇都宮利久先生<br>演題「保内の銅鉦山と佐島製煉所について」  |
| 9.29         | 課外講座 奥伊予見学<br>～野村町惣川土居家他～                        |
| 11.2         | 課外講座<br>藤本哲朗氏（自衛隊広報室長）<br>演題「阪神大震災・災害後の対策」       |
| .3           | 第3回講座<br>町田忍氏（銭湯文化研究家）<br>演題「番台からのメッセージ」 会場：清水湯  |
| .15          | 課外講座<br>らくさぶろう（はなまる調査団）<br>～年忘れお笑い寄席～            |
| 平成9年<br>1.8  | 緊急講演会<br>伊東孝氏（日本大学教授）<br>演題「何故いま“橋”なのか？」美名瀬橋について |
| 2.23         | 第4回講座<br>井沢元彦氏（作家）<br>演題「歴史に学ぶ」-逆説の日本史より-        |

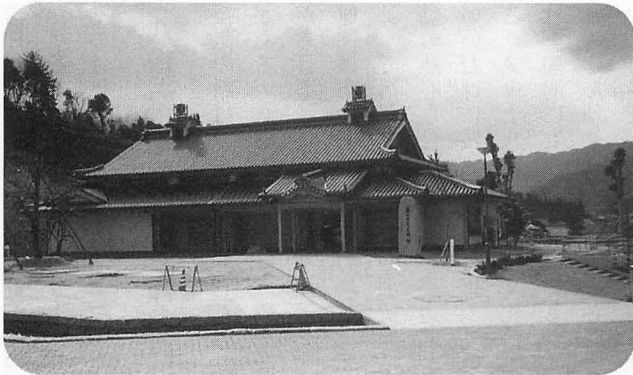
いにしえのやかた  
『藤山歴史資料館』  
オープン  
大西町

藤山歴史資料館は、都市公園「藤山健康文化公園」のなかで各種パブリックサービスを案内する所です。

資料館内としてエントランスホールは古墳のかたをくみためたパズルや、TV映像などを備え、アミューズメント空間として楽しめる所です。

常設展示室は「妙見山古墳群一号墳（前方後円墳）」を中心に土に埋もれた文化財を展示しています。

企画展示室は一〇〇㎡の仮設展示室データベース。移動式のボードで室内を区切り会議、講演にも利用できます。



会議室（和室）は畳敷きの落ち着いた日本間です。華道、茶道のおけいこや、ご会合に適しご休憩にも利用できます。

- ・午前九時～午後五時
- 〈開館時間〉
- ・毎週月曜日・年末年始
- 〈休館日〉
- 〈問い合わせ先〉
- ・藤山歴史資料館
- ☎0898（53）2313

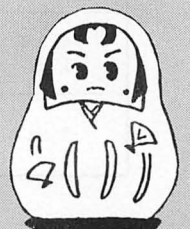
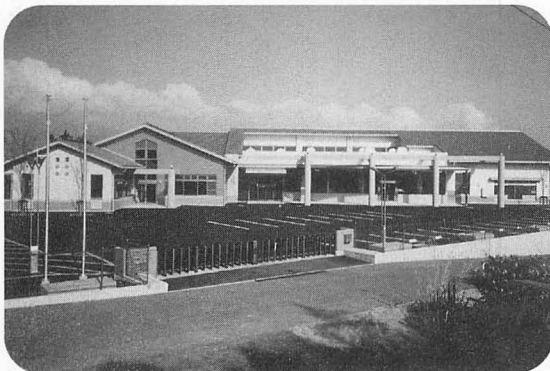
高齢化社会の  
安心施設  
『地域福祉保健センター』  
オープン  
小松町

「小松町地域福祉保健センター」の基本理念は、「ひとりの不幸も見逃さない」という福祉コミュニティを構築していく中で、住民が年齢や障害などのハンディにかかわらず、安心して生活ができ、自己の意志に基づいて社会参加ができるノーマライゼーションの理念を推進することです。

当センターでは多様な高齢者ニーズに対しても、必要な時にサービスを利用できるよう連携した地域ケアシステムづくりをめざしています。福祉保健に携わる専門職を集合し、在宅介護支援センターも併設しているので、各セクションに分かれていた福祉保健に関する相談やサービスの提供がこ

の施設で対応していただけるよう体制を整えています。

- ・午前八時三十分～午後五時十五分
- 〈利用時間〉
- ・土曜日、日曜日、祝日
- ・年末、年始
- 〈休館日〉
- 〈問い合わせ先〉
- ・小松町地域福祉保健センター
- ☎0898（72）6363



年中泳げる  
温水プール完備  
『伊方スポーツセンター』  
オープン  
伊方町

平成八年八月に新築落成しました。

この施設は、町民の健康増進と青少年の健全育成を目的に建設され、二階には年中泳げる温水プール（二五m×六コース、補助プール）、三階・四階にはアリーナと観客席があり、バスケットボールが二面、バレーボール（六人制）なら三面とれる南予でも有数の施設です。

《施設の概要》

(1)階級 地上四階・塔屋一階

(2)延べ面積

六、〇七五

・七七㎡

(3)内部設備

・伊方スポーツセンター

☎ 0894 (38) 1100



あふれる緑に囲まれて建つ瀟洒な木造二階建てです。すべてのノウハウをパッケージ化した最新の設備と豊富なソフト。

充実の設備で  
21世紀を応援します  
『林業技術研修館』  
オープン  
愛媛県

「明日の林業」を見つめ、確かな体験し、会話が弾みます。

郷土の未来を担う若い林業技術者育成のためにお役立てください。

《研修の内容》

○林業技術研修

近代的な林業技術及び林業経営に関する各種研修

○林業体験教室

小・中学生を対象とした森林・林業の知識の習得

○受入れ研修

林業・林産業に関する知識・技術の習得希望者を特別に受入れて

行う研修

《研修施設の概要》

・技術研修館

（木造二階建て五五<sup>2</sup>㎡）

・機械保管庫

（鉄骨平屋建て二二〇<sup>2</sup>㎡）

・技術訓練フィールド

（二二七<sup>2</sup>㎡）

・研修用機械器具類

《問い合わせ先》

愛媛県林業試験場（久万町）

技術研修館

☎ 0892 (21) 0690



## 地域づくりビデオ（貸出し）のご案内

当センターでは、「地域づくりビデオ」を備え、無料で貸出しをしています。今回下表のビデオが新しくそろいました。ぜひご利用ください。（貸出し期限は原則として2週間以内です。）

| No  | タ イ ト ル                            |          |                    |
|-----|------------------------------------|----------|--------------------|
| 131 | ふるさと再発見                            | H 7 第1回  | ～発展を支えるたくましい県土づくり～ |
| 132 | ふるさと再発見                            | H 7 第2回  | ～21世紀のふるさと創造～      |
| 133 | ふるさと再発見                            | H 7 第3回  | ～快適で魅力のある地域づくり～    |
| 134 | ふるさと再発見                            | H 7 第4回  | ～力強くいきいきとした産業づくり～  |
| 135 | ふるさと再発見                            | H 7 第5回  | ～安心できる明るい福祉社会づくり～  |
| 136 | ふるさと再発見                            | H 7 第6回  | ～快適で魅力ある地域づくり～     |
| 137 | ふるさと再発見                            | H 7 第7回  | ～創造的で豊かな人と文化づくり～   |
| 138 | 笑顔がいちばん                            |          |                    |
| 139 | 激論 どうするこれからの大洲ダイジェスト 大洲まちづくり討論会    |          |                    |
| 140 | ふるさと再発見                            | H 7 第8回  | ～安心できる明るい福祉社会づくり～  |
| 141 | 新しい風・智頭町 ～私たちの町が変わる～               |          |                    |
| 142 | 森を考える②（宮崎県） ～森の時間人の営み林業の再生をかける～    |          |                    |
| 143 | 列島リレー 「ふるさと交差点」 鈴木繁夫               |          |                    |
| 144 | ふるさと再発見                            | H 7 第9回  | ～力強くいきいきとした産業づくり～  |
| 145 | ふるさと再発見                            | H 7 第10回 | ～発展を支えるたくましい県土づくり～ |
| 146 | 長浜の四季 長浜町合併40周年記念ビデオ ～肱川あらしと開閉橋の町～ |          |                    |
| 147 | ふるさと体験・成功への道                       |          |                    |

桜の花も咲き始め、何事にもやる気の出でくる季節となりました。今まで忙しくて出来なかつた事、新しい事にチャレンジしてみたいかがでしよう。例えば、読みかけの本を読んだり気ままな旅に出かけたりするのいいかもしれないですね。

\*\*\*\*\*

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 089(932)7750

FAX 089(932)7760

発行/平成九年三月二十日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

(財)愛媛県市町村振興協会